

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593298

研究課題名(和文) 病院で療養する終末期がん患者の主体性を理解するためのアセスメントツールの開発

研究課題名(英文) development of the assessment tool for understanding terminal cancer patient's subjectivity in the hospital.

研究代表者

大浦 まり子(Ooura, Mariko)

岡山大学・保健学研究科・助教

研究者番号：40321260

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：終末期がん患者がその人らしい生を生き抜くことを支える看護の実践のため、終末期がん患者の主体性を理解するためのアセスメントツールの開発を目指し本研究に取り組んだ。主体性を「自分自身の生を生き抜く主体としてのありよう」とし、まずは患者が終末期の日常をどのように生きようとしているかを捉えることを目的に、一般病棟および緩和ケア病棟入院中の終末期がん患者のインタビューを分析した。その結果、患者の主体性は「状況の受け止め方と状況への向き合い方の様相」に現れ、がん罹患から現在の経験の意味づけ、状況との折り合いのつけ方が含まれていた。アセスメントツールの開発にはさらなる分析と追加研究の必要性がある。

研究成果の概要(英文)：For practice of nursing supporting terminal cancer patients surviving the own life, I studied with the aim of development of the assessment tool for understanding terminal cancer patient's subjectivity. I defined "subjectivity" as "how as a subject which survives itself to exist." For the purpose of catching how the patient is going to live the every day of end of life. I analyzed the interview of the general ward and the terminal cancer patient under the general ward and the palliative care unit. As a result, the patient's subjectivity had appeared in "the aspect of how to respond to a situation and how to a situation to face ." How to make a compromise of situation and meaning of the experience in the present from a cancer disease was contained. There is the necessity for the further analysis and additional research in development of an assessment tool.

研究分野：がん看護学

キーワード：緩和ケア 終末期がん患者 主体性

1. 研究開始当初の背景

終末期がん患者が最期までその人らしく生き抜くとは、患者が自分の生を最期まで主体的に生き抜くことだといえる。その実現のためには、第一義的に終末期がん患者がどのように生きたいかを理解する枠組みのもと、その在り方を尊重する一貫した支援が必要であり、苦痛・苦悩の緩和も、その支援の系統の中に位置づけられ最優先されるものであると考える。しかし、現在の終末期がん患者の支援の主流である緩和ケアにおける対象理解は、全人的苦痛の枠組みに準じた身体的・心理的・社会的・霊的存在とする枠組みでの全人的理解となっており、患者がどのように生きたいかを統合的に理解できる枠組みは示されていないと考える。

近年は、がんサバイバーシップ²⁾の理念において、患者の立場からがんに罹患しても主体的に生き抜くことが主張されるようになり、それは終末期においても死ぬ瞬間までの生を主体的に過ごせるということである。しかし、患者の主体性を理解するための具体的な枠組みは示されておらず、これまでの国内の研究においても、終末期がん患者の主体性そのものに焦点を当てた研究は見当たらなかった。

上記の背景から、まずは病棟で終末期を過ごすがん患者の主体性を理解するためのアセスメントツールの開発を目的に、本研究を行った。

2. 研究の目的

- 1) 終末期がん患者が入院病棟において終末期の日常をどのように生きようとしているかを、患者の主体性から明らかにする。
- 2) 病院で療養生活を送る終末期がん患者の主体性を理解するためのアセスメントツールを開発とする。

3. 研究の方法

【本研究期間前の実施段階】

- 1) 対象：一般病棟および緩和ケア病棟入院中の終末期がん患者で次の条件に該当し、研究協力への同意が得られた患者とした。成人期～老年期、病名告知が行われている、積極的治療ではなく緩和ケアのみを受けている、比較的心身の状態が安定しており、意識明瞭で音声言語によるコミュニケーションが可能、性別、がんの部位、ADLの自立レベルは不問
- 2) 調査期間：2009年7月～2010年4月
- 3) 調査方法：
 - (1) 研究協力を得られた患者への半構造的インタビューを行った。内容は、緩和ケア

中心の療養生活に移行したいきさつから、日々の過ごし方、今後の希望などについて語ってもらい、日常生活や治療上の自己決定や、自分らしさ、がん体験の捉え方、身体状況の捉え方、セルフケアへの取り組み、家族や医療者の関与に関する語りに着目し、適宜質問を行いながら傾聴した。インタビューはプライバシーの確保された場所で行い、インタビューの時間と回数、場所は、研究参加者の全身状態や希望に合わせて調整した。インタビュー中は患者の意向により家族の同席も可とし、家族との会話も含めてデータとした。

- (2) 参加観察として、インタビュー中の患者の表情やしぐさ、看護師や他職種との関わりの場面などについて参加観察を行い、フィールドノートに記録した。
- (3) 研究協力を得られた患者の看護記録・診療録から、患者属性、病状経過、検査データ、看護師や他職種の関わりの場面の記録などについて、情報を得た。

4) 倫理的配慮：

研究者から研究対象者に、研究の目的・意義と方法、研究に参加することの利益並びに不利益および危険性の説明、自由意思で参加または不参加を選択できること、いつでも同意の撤回ができ、たとえ研究に不参加または途中撤回したとしても何ら不利益な取り扱いを受けないことについて、説明書を用いて十分に説明し、同意書への署名にて同意を得た。また研究の最中、インタビュー内容を録音することの承諾を得た。

研究対象者の負担に配慮し、適宜体調確認やインタビュー継続の意思確認を行いながら実施した。

5) 分析方法：

- (1) インタビューを逐語録に起こし、データとした。
- (2) 現象学的研究の文献を参考に、「対象者が入院病棟において終末期の日常をどのように生きようとしているか」を示すテーマ分析を行うにあたり、まず個別のデータ分析に取り掛かった。

【本研究期間中の実施内容】

5) 分析方法続き

- (3) 個別分析において分析の方向性が定まらなかったため、「対象者が入院病棟において終末期の日常をどのように生きようとしているか」に向かう対象者の主体性をデータから見出せるよう、本研究において主体性を【自分自身の生を生き抜く主体としてのありよう】³⁾⁻⁷⁾と設定し直し、対象者の体験に内在する意識や身体の志向性を読み解くように進めた。
- (4) 分析過程において、表面的な分析にとどまりがちであったため、現象学的研究にお

ける分析方法の習得が未熟であることが原因と判断し、方法論の文献⁸⁾⁻¹⁰⁾と、現象学的看護研究を行っている研究者らが主催する研究会¹¹⁾に可能な限り参加し、分析技能の向上を図りながら、個別のデータ分析を書き直すことを続けた。

- (5)データの解釈においては、参加観察の記録、看護記録・診療録の内容もふまえて行った。
- (6)個別のデータ分析後、テーマの統合に向かう全体分析に取りかかった。この時点でテーマの構造を捉えるために「事象そのものへ」という現象学的研究の本質から離れないよう何度もデータに立ち返りつつ進める必要があった。その行きつ戻りつの過程で、データの解釈の更新や個別分析のテーマの変更が何度も起こり、現在も分析結果は更新中の段階であるとともに、研究目的に到達するための多くの課題が見つかった。

4. 研究成果

1)対象の概要

インタビュー協力の得られた終末期がん患者は、男性9名(一般病棟4名・緩和ケア病棟5名)、女性4名(一般病棟1名・緩和ケア病棟3名)の計13名であった。

対象者が緩和ケアのみの生活に移行してからなくなるまでの期間は2週間から9ヶ月、1回目のインタビューから死亡日までの期間は2日~164日、また1名はインタビュー後に自宅に軽快退院となった後、調査期間中は存命であった。

本研究において、自宅軽快退院した1名(緩和ケア病棟・女性)、および面接日から死亡日までの期間が他の患者に比べ特に長かった患者2名(緩和ケア病棟・男性1名、女性1名)を除く10名のインタビューを、分析対象とすることとした。

分析対象となった研究協力者の年齢は49~84歳で平均67.1±10.3歳、初回面接日から死亡日までの期間は2日~66日、インタビュー回数は1人1~3回、1回のインタビュー時間は30分~2時間であった。

研究協力者の概要を以下に示す。

<性別・年齢・病名>

	性	年	病名
A	女	69	肝細胞がん
B	男	84	右尿管がん
C	男	66	直腸がん
D	男	68	前立腺がん
E	男	56	大腸がん
F	女	47	左臀部扁平上皮がん
G	男	74	悪性リンパ腫
H	男	67	直腸がん
I	男	64	肺がん
J	男	76	胆管がん・胃がん

<入院病棟および最初の面接日から死亡日までの期間>

	入院病棟	初回面接~死亡日
A	一般病棟	8日
B	一般病棟	65日
C	一般病棟	5日
D	一般病棟	33日
E	一般病棟	28日
F	緩和ケア病棟	10日
G	緩和ケア病棟	8日
H	緩和ケア病棟	32日
I	緩和ケア病棟	66日
J	緩和ケア病棟	32日

本研究において、主体性を【自分自身の生き抜く主体としてのありよう】とし、研究協力者が終末期の日常をどのように生きようとしているか、という視点で分析を試みた結果、研究協力者の主体性は、がん罹患時から現在に至る経験や病状認識、症状、家族や医療者の関わりなど、自分と自分を取り巻く「状況の受けとめ方と状況への向き合い方の様相」として現れると考えられた。

「状況の受け止め方」には、がん罹患や病状、出来事に対する<意味づけ>が含まれ、意味づけは同病者との出会いや家族関係、医療者の言葉などなんらかの<きっかけ>によって形づくられたり変化していた。また意味づけやきっかけが、個々の<状況との折り合い方>を含む「状況の向き合い方」をもたらししていた。

研究協力者の意思や行動は、症状緩和、食事ができること、家族とのつながり、医療者がそばにいる安心感を求めるという望みに向かうものであり、それが叶えられたときは、より安寧に方向付けられた意味づけや状況への向き合い方が促されていた。

また<状況との折り合い方>には「自分の死の差し迫りに自分なりに折り合いをつける」という課題が含まれ、混乱の最中から折り合いがつくまでの個々の状態に年齢や症状、医療者や家族の関わりなどの要件が絡み合っていた。がんの転移により歩行障害が現れていた研究協力者は共通し、急激に身動きの取れなくなった状況そのものに折り合いがつかず、混沌として苦悩が強くなり、看護師の援助も苦悩の緩和に届いていないことが示唆された。

以上について現在も分析途中であり、アセスメントツールの開発のため、さらに分析を進めているところであるが、課題として、がんの進行や骨転移により終末期に歩行障害を併発した患者には特有の体験世界があると考えられたため、その患者に焦点を当てた追加研究が必要である。

また、研究協力者の初回面接日から死亡

日までの数日単位，約 1 ヶ月，約 2 ヶ月という期間の差が示す主体性の現れ方の違いを考慮した分析について，さらに検討していく必要がある．

<文献>

- 1) 峰岸秀子，千崎美登子編著：がん看護の実践-1・エンドオブライフの緩和ケアと看取り，医歯薬出版株式会社，2008
- 2) 近藤まゆみ，峰岸秀子編著：がんサバイバーシップ・がんとともに生きる人びとへの看護ケア，医歯薬出版株式会社，2006
- 3) 佐藤泰子著：苦しみと緩和の臨床人間学 聴くこと，語ることの本当の意味 ，晃洋書房，2011
- 4) 水野道代，佐藤禮子：がん患者の終末期における経験とその意味の探求，日本がん看護学会誌，9(1)，27 - 35，1995
- 5) 黒田寿美恵，佐藤禮子：終末期がん患者の選択する生き方とその本質，人間と科学，県立広島大学保健福祉学部誌，8(1)，70-81，2008
- 6) 島田美紀代，正木治恵：看護者がとらえにくいと感じる高齢者の主体性に関する研究，老年看護学，11(2)，112-119，2007
- 7) 渡邊淳司：主体性の認知科学的展開，未来心理，9号，5-13，2007
- 8) Max.van.Manen 著，村井尚子訳：生きられた経験の探求 人間科学がひらく感受性豊かな<教育>の世界 ，ゆみる出版，2011
- 9) 大久保功子著：看護における質的研究 解釈学的現象学による看護研究・インタビュー事例を用いた実践ガイド，日本看護協会出版会，2005
- 10) 松葉祥一，西村ユミ編集：現象学的看護研究・理論と分析の実際，医学書院，2014
- 11) 臨床実践の現象学研究会
<http://clinical-phenomenology.com/>

5．主な発表論文等

(研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1) 研究代表者

大浦 まり子 (Ooura Mariko)
岡山大学大学院保健学研究科・助教
研究者番号：40321260

(2) 研究分担者

齋藤 信也 (Saito Shinya)
岡山大学大学院保健学研究科・教授
研究者番号：10335599

(3) 連携研究者

近藤 真紀子 (Kondo Makiko)
岡山大学大学院保健学研究科・準教授
研究者番号：70243516